

悩み・苦痛の逆療法

第1部 解脱の真理の発見

(42) 便所掃除は誰にとっても価値ある仕事か

禅宗においては、便所のことを東司とって、この東司の掃除は最高の仕事であるとしている。

そして、この便所掃除は、見込みのある者にしかやらせないのである。この便所は、旧式の便所であるから、臭いし汚い場合もありうるのである。禅宗では、一般的に日常の仕事を作務と呼び、自己修養として、重視しているのである。その中でも、便所を掃除することが、最高の修練の機会を与えているのである。

しかし、一方において、便所掃除を業務としている人々にとって、この便所掃除は、どのような意義を持っているのであろうか。禅宗の僧侶にとって最高の修練の機会を毎日のように行えば、さぞ便所掃除人の中から悟りを会得する人が多く輩出するだろうと考えられそうだが、失礼ながら、そういう話は、あまり聞かない。この違いは、いったい何から生じるのであろうか。

結論を先に述べると、便所掃除をする目的と掃除をする際の心の在り方の違いからくるのである。この目的に関連して、マルクスは、労働観について、次のように述べている。「労働は、本来は目的（労働それ自体が目的）であったものが、資本主義社会になって労働が商品になってしまって、パン（生活の糧）を得るための手段に墮してしまっただけで目的でなくなった。己れの欲するところに従って働き、自分の欲しいものだけを得ることができる共産主義社会になってはじめて、労働が目的となる」と言っている。

マルクスは、共産主義という幻想で一世紀近くの間、世界を混乱させた人ではあるが、この労働観には、鋭い洞察力がうかがえるのである。それはどういうことかといえば、労働は本来、それ自体に崇高なはたらきを持っているのである。すなわち、労働は、自己修養の場であり、自己の能力を十分に発揮して、自己実現をして充実感を与える場でもあるという点である。

この自己実現に関しては、経営学者であるマズローの欲求五段階説でも、自己実現の欲求は、人間が持つ欲求の中でも最高の欲求であると述べている。そして、多くの場合、仕事において自己の能力を発揮して自己実現をすることができるのである。

この労働の目的性を便所掃除に当てはめると、禅僧は、自己修養として掃除を行うのに対して、便所掃除人は、報酬を求めめるため、すなわち、マルクスの言うパンを得るために掃除をするのである。この点において、同じ便所掃除を行っていても、目的が違えば仕事の意義、そして効果は、大きく違ってくるのである。

しかし、これだけで、仕事の悟りへの効用を述べたことにはならない。なぜならば、同じ禅僧が同じ便所掃除をしても、ある層には、悟りに効験があるが、他の僧には効験がないことの違いを説明できないからである。その違いは、便所掃除をする時の心の在り方なのである。臭くて汚い便所を掃除することは、誰にとっても嫌なことで苦痛なのである。その嫌な仕事をする時に、その苦痛を抑えこんでやるのか、その苦痛をしっかりと意識し噛みしめ味わい更には強めながらやるのかでは、効験に天地の差が生じてくるのである。このため、同じ禅僧でも、心の在り方により、悟りへの効験が違ってくるのである。

そして、この心の在り方次第によって、マルクスの言う資本主義社会における労働が目的的にもなりうるのである。確かに、現代の労働の多くは、パンを得るためのものであるが、労働に伴う大小様々な苦痛を噛みしめ味わい更には強めれば、煩惱解脱の絶好の修練場にもなるし、より良い自己実現にもなるのである。なにも、幻の共産主義社会でしか、労働が目的的になりうるわけではなく、資本主義社会でも心の在り方次第で労働は目的的になるのである。

なお、労働に伴う苦痛と述べたが、この苦痛には、便所掃除のような不潔による苦痛とか、3K（汚い・きつい・危険）と言われるような仕事の苦痛もあるが、単純で単調な仕事を続けることもある種の苦痛を伴う。また、自己実現する機会の多い、高度な知識・経験・判断力を伴う専門的業務においても、より良い成果を出そうとすれば、それなりの苦勞・苦痛を伴うものである。

これを短歌にすると、

労働の 苦痛噛みしめ 強めれば
煩悩解脱の 効験あらたか

となる。

煩悩を紛らわす方法として、各種の方法があるが、煩悩を噛みしめながら仕事に精を出すことは、煩悩解脱に非常に効果があるのである。ただし、注意すべきことは、煩悩を解脱するために仕事に精を出すのではなく、仕事に精を出せば煩悩の解脱に役立つということである。この両者の違いは、大きいのである。